

Title	人民時代・人民文学：1945～49年のティンペーミン
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学論集. 20 p.101-p.128
Issue Date	1999-03-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79787
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

人民時代・人民文学－1945～49年のテインペーミン－

南 田 みどり

People's Age People's Literature —Thein Pe Myint 1945～49—

Midori I. Minamida

Thein Pe Myint (1914～78) started to write novels in 1933. Although he loved to write novels as if they were his children, he could not write them in 1941～47. The reason why he could not do it was that he was very busy with his political movement. How would his novels reflect his political experience?

I have already written about the influence of his Anti-Fascist movement in 1941～45 on his literature. In this paper I tried to consider about the influence of his postwar movement —his struggle both inside and outside BCP— on his novels. The content of the paper is as follows.

Chapter 1 Until writing the new novel

1 Background 1 (Apr.'45～Jul.'46) —As the General Secretary of BCP—

2 Background 2 (Aug.'46～Dec.'47) —The struggle inside BCP—

Chapter 2 Over the literary vacuum

1 The literary argument

2 'Not Till After Independance'(1948)

3 The light and shade of Burmese Independance

Chapter 3 Until writing the next novel

1 Background 1 (Jan.'48～Mar.'48) —Last struggle inside BCP—

2 Background 2 (Apr.'48～Aug.'48) —The struggle outside BCP—

Chapter 4 Novel again

1 "The Way Out" (1949)

2 The characterization of the masses and the classes of postwar Burma

3 The critiques on "The Way Out"

Chapter 5 People's Literature

1 The next literary argument

2 'All's Well Sir'(1949)

3 'How Could They Call Him Traitor'(1950)

序

テインペーミン（1914～78）の全短編を網羅した短編集の復刻が企画され、あとは検閲を待つだけだと聞いたのは、報道が軍事政権・国家法秩序回復評議会のASEAN加盟随喜一色に染まる97年夏だった。情報統制下、小説不振の時代に、文学史上足跡を残したピーモウニン（1883～1940）、マハースエー（1900～53）らの作品集復刻が⁽¹⁾相次ぐのは、せめてもの朗報かと思われた。

翌98年夏のヤンゴンでは、軍事政権・国家平和発展評議会（97年11月改称）が、極微の抵抗の芽の封印にも躍起となる中、通貨価値下落（前年1ドル実質230チャットが380チャットに）と大規模な停電に見舞われていた。出版業界では、一部を除き定期刊行物の出版も滞り、くだんの短編集の出版も大幅に遅れる模様であった。

新たな短編集は、一編を除く全編が検閲を通過していた。検閲局の陣容が強化され、定期刊行物も、事前提出の見本誌から少なからぬ短編や詩が削除される現状⁽²⁾からすれば、テインペーミン短編集のほぼ全編が検閲を通過したことは僥倖というべきかもしれない。しかし全編掲載という遺族のささやかな要望が踏みにじられ、一編が削除された事実は、今日のビルマ文学界の困難の一端を物語る。その一編とは、45～49年の史実を背景とし、議会制民主主義時代の50年2月雑誌に発表され、52年に短編集に収録され、旧軍事政権・ビルマ式社会主義時代の66年に新たな短編集に収録され、68年にも再版された「裏切り者だとは」である。

1933年から小説を発表し始めたテインペーミンは、41年から47年まで小説執筆を停止した。彼を小説から遠ざけたものと、彼を再び小説に引き戻したものは、その期間の政治体験であった。この期間のうち41年から45年までの抗日時代については、すでに考察してきた⁽³⁾。本稿は45～49年、すなわち「裏切り者だとは」の背景をなす時代に焦点を当て、作者の軌跡からこの時代を舞台にした彼の小説の意味を考察するものである。

第一章 小説への回帰の前に

1 小説回帰の背景 1—ビルマ共産党書記長時代—

45年8月から46年7月まで、テインペーミンはBCP（Burma Communist Partyビルマ共産党）書記長だった。テインペーミンの抗日闘争をその生涯最高の政治的成功と見る評価は少なくない⁽¹⁾。さらに、党書記長時代の46年頃が政治生命の頂点だったという見方もある⁽²⁾。彼を党書記長の「栄光」に押し上げたものは、第一に抗日闘争における彼の「活躍」、第二に第二次大戦終了後の反ファシズム勢力全体を覆う楽観主義であった。

45年4月4日カルカッタ郊外の抗日基地ベハラキャンプで、彼は抗日統一戦線AFO

（Anti-Fascist Organization 反ファシスト撲滅組織）蜂起「成功」の報に接した。しかしそれは戦後ビルマの政治的混迷の開始でもあった。その萌芽を抗日闘争自体が内包していたとテインペーミンは考える。第一に、A F Oの中核を成す共産主義者が、理論偏重、少数精鋭主義、セクト主義に陥り、抗日闘争を連合軍との協力による武装蜂起にのみ依拠し、大多数の農民大衆のオルグを軽視し⁽³⁾、第二に、彼も含めた共産主義者が、抗日蜂起後即時権力奪取と民族解放臨時政府樹立の闘争を放棄するという「右の過ち」にも陥った⁽⁴⁾からであった。

第一の点は、ビルマ国内の共産主義者のセクト主義や冒険主義にかかわり、国外のテインペーミンのあずかり知らぬことといえようが、第二の点は彼のインド時代とかかわりを持つ。P R P（Peoples Revolutionary Party 人民革命党）に在籍していた共産主義者テインペーミンが、抗日の任を帯びてインドに赴き、その後いつB C Pに入党したかはさだかでない⁽⁵⁾が、ベハラキャンプで彼は、ビルマ抗日勢力在外代表として、A F O本部と連合軍の連絡を結び、内外の来訪者を迎え⁽⁶⁾て交流するほか、ビルマ、インド両共産党の連絡の任にもあたり、45年1月以降は書簡や書籍をパラシュート部隊と共にA F Oに送付していたのである⁽⁷⁾。

B C Pは、テインペーミンの書簡や送付物から影響を受けた。そしてテインペーミンの背後にはC P I（Communist Party of India インド共産党）が存在した。A F O書記長でB C P指導者の一人タキン・タントゥンは、45年5月29日平和革命路線を提起し⁽⁸⁾、6月16日B C P書記長タキン・ソウと連名で、世界民主勢力と米ソ同盟を基礎として、英国帝国主義とビルマの矛盾を平和的に解決せよと宣言し⁽⁹⁾、7月7日のB C P第二回大会では英国労働党との協議による平和的独立獲得路線を打ち出した。大会は同時にインド在住のテインペーミンを書記長に選出した。8月5日その報を受けた彼は、多少の誇らしさと共に、外国在住者を本人の意向も打診せず書記長に選出したことへのわだかまりも感じている⁽¹⁰⁾。

テインペーミンのB C P書記長在任は、実質的には9カ月足らずである。10月17日、英国軍政が廃止されドーマンスミス総督の民政復活の翌日、彼は帰国した。バーガー通り前のB C P本部に賄い付き月給60チャットで住み、彼は党日刊紙『ピードゥーネズィン（人民日報）』週刊誌『ピードゥーアーナー（人民権力）』に論説を精力的に執筆した⁽¹¹⁾。そして11月に総督諮問機関・行政参事会入閣を拒否したA F P F L（Anti-Fascist Peoples Freedom League 反ファシスト人民自由連盟 A F O改称）とは団結を固めながら、独立獲得闘争の先頭に立った。

しかし4カ月後、彼は最初の試練を迎える。46年2月、B C P中央委員会でソウは党の「ブラウダー主義」という名の右翼偏向、改良主義を激しく批判し、その導入の責任者としてテインペーミンを糾弾した。タントゥンとテインペーミンは帝国主義を平和勢力と見た過ちを認めながらも、当時指導部にいたソウにもその責任はあると反論した⁽¹²⁾。ソウはさらに、自分が指名する委員による中央委員会への改組を要求し、それが否決されると、6名の中央委員を率いて離党し、C P B（Communist Party of Burma 赤旗共産党）を結成する。

C P Bはその過激な闘争によって、46年7月非合法化される。しかしソウは、その後も執拗

にBCPの「改良主義」を批判した。この「分裂」は党内に大きなしこりを残した。BCP創設者で党随一の理論家のこの言動は、党員を少なからず動揺させ、解党主義的雰囲気まで漂った。

「右の過ち」への反動として「左」への傾斜が開始する。それはセクト主義となって表面化し、BCPとAFPPFLの関係を悪化させ⁽¹³⁾、タントゥンはAFPPFL書記長を辞任する。46年7月6日の中央委員会は、タントゥンをBCP書記長に選出した。

テインペーミンはタントゥンにかわり、統一担当政治局員としてAFPPFL執行委員会内BCP代表者となる。今後困難な展開が予想されるAFPPFLとの折衝を任せられたことは、テインペーミンの実質的降格を意味する。中央委員会に向けたテインペーミンの書記長報告案は、政治局で議論もなく否決され、タントゥンの報告案が承認された。テインペーミン報告は、ソウの教条主義を批判し、解党主義に抗して共産党の必要性を説き、現在の主要矛盾は帝国主義と全ビルマ人の矛盾で階級矛盾は二義的であるから、AFPPFL内でBCPは孤立せずBSP（Burma Socialist Party ビルマ社会党 NRP改称）と団結するよう強調していた。これが承認されなかったのは、タントゥン、パヘイン、ゴシャールらテインペーミン以外の政治局員が、「理論家」ソウの教条主義や冒険主義的階級矛盾論と決別できず、CPBと合併する意志すらあったからである⁽¹⁴⁾。

「共産党は自らの過ちを認識したとき全責任をテインペーに押し付けた」⁽¹⁵⁾とその友人が追悼するように、テインペーミン批判は文学より政治関係に多い。その最たるものは「改良主義」導入の責任糾弾である⁽¹⁶⁾。前述の如く「改良主義」はすでにテインペーミン帰国前、ソウを責任者とするBCP指導部によって「導入」されていた。議論の末の「導入」であれ、事大主義的な無批判の導入であれ、導入の当事者は当時の党指導部である。「大国」の党に依拠し、長老ソウの族長的支配⁽¹⁷⁾に屈する未成熟な党に、「社会主義的理想実現」の夢を託したがゆえに、テインペーミンは出口のない闘争に船出せねばならなかった。

2 小説回帰の背景2－党内闘争時代－

テインペーミンは46年9月、AFPPFL書記長ポストをBSP代表チャーニェインと争い、53対52で敗れた。これはAFPPFL内で飛ぶ鳥を落とす勢いだった共産党の凋落の前兆だった。しかしセクト主義とは無縁の⁽¹⁸⁾テインペーミンは、副書記長としてその後もチャーニェインの活動を補佐した。

46年8月から9月にかけて生じた労働者、農民、公務員の大規模な闘争は警官ストにも波及し、ゼネストの様相を呈する。高揚は9月30日の行政参事会に、アウンサン（首相、防衛、外務）、タキン・ミャ（内務）、テインペーミン（農業、農村経済）らAFPPFL幹部6名が参入して終結する。当時テインペーミンは32歳、英連邦最年少にして初の共産党員閣僚だった。ところが10月、彼がシンガポールで開催された世界食糧会議に出席中、BCPは入閣を過ちだったと声明する。ソウとCPIからの電信批判を受け入れたためである。10月10日、

A F P F LはB C P除名を発表し、10月22日テインペーミンは閣僚を辞任した。

入閣に関しては党内でも意見が割れ⁽¹⁹⁾、テインペーミン自身も懐疑的であった。彼は社共のより固い団結で9月闘争が闘われていたら、総督の譲歩としてのA F P F L 6名入閣どころか、官僚機構を破壊し無血で人民権力樹立を導けたかもしれないと考えた。A F P F L内の不団結が帝国主義者の懐柔を容易にした。A F P F L脱退後先鋭化したB C Pの一部は地域で武器を取り、小競り合いも生じた⁽²⁰⁾。一方11月22日、テインペーミンはB C P本部勤務員キンチーチーと結婚し⁽²¹⁾、市内に転居した。

12月、B C PはC P Iの11月27日付「ビルマの同志たちへの書簡」を受け取る。書簡はタキン・ソウの追放撤回、C P Bとの合併、最終権力奪取のためA F P F Lとの団結を指示していた。テインペーミンは書簡が、ソウの闘争の過大評価、セクト主義の危険性の軽視、アウンサンを資本家階級代表と規定していることなどに不満だったが、A F P F Lと団結を求めるのは概ね正しい路線と考えた。B C P中央委員会は書簡を受け入れ、テインペーミンを過去の誤謬の責任者として、学習のための6カ月の休党を決定した⁽²²⁾。

47年1月、行政参事会代表団は英国でアウンサン＝アトリー協定を締結し、4月政憲議会選挙を実施して、独立への歩みを速める。B C Pは、1月14日労働者デモでA F P F Lと共闘するが、2月には協定のすべてを攻撃し、制憲議会選挙への取り組みも弱かった。その結果A F P F Lはビルマ本州184議席中173議席を獲得して圧勝し、B C Pは7名だけが当選（28人立候補）した。休党中のテインペーミンは原典理論学習に励み、B C Pが改良主義からセクト主義に再び偏向したことを確認する。そこでB C PとA F P F Lとの団結再建のため、選挙に関する見解を幾度となく中央に送るが、黙殺される⁽²³⁾。

47年7月19日アウンサン、タキン・ミャ、ウー・バチョウら行政参事会閣僚7名暗殺後、タキン・ヌを首班とする行政参事会が急遽再編される。B C PはA F P F Lとの団結のための会談を再開し、民衆の怒りの組織化よりむしろ入閣に意欲を燃やした。それに危機感を持った閉塞の中のテインペーミンは、7月26日、B C Pは入閣より大衆闘争を浸透させよとの提案を盛り込んだ評論を『ミャンマーアリン』紙ならびに『ヒッタイン』紙に「団結建設者」との偽名で発表した。その結果中央委員に復帰する資格は剥奪され、中央直属平党员に格下げとなった⁽²⁴⁾。

10月、ヌ＝アトリー条約が締結され、翌48年1月4日独立ビルマ連邦共和国が誕生し、憲法が発効する。意思表示の場を奪われてなおテインペーミンが党内にとどまったのは、党内民主主義による自浄作用の可能性に望みを託したからであろう。48年1月、10年振りに発表した小説が、その当時の心境を表出させている。

第二章 10年の空白を越えて

1 文学論争

48年1月、ビルマ独立と同時にテインペーミンは文学界に復帰した。独立式典では彼の脚本

によるミュージカル「金の雨銀の雨」⁽¹⁾が上演された。彼はまた、1月4日号の『ジャーネーション』誌と『ターヤー』誌に文芸評論「時代を後退させる作家たち」⁽²⁾を、『ダゴン』誌に短編小説「独立すれば」を発表した。評論は戦後文学への提言であり、小説はその具現化であった。

「時代を後退させる作家たち」は、大多数の抑圧される階級解放の立場から、とりわけ植民地時代以降のビルマ小説の特徴を、具体的に作品名を挙げて齒に衣着せず批評するもので、この試みにおいては先鞭をつけた評論である。ティンペーミンは、自己の長編『進歩僧（テッポンヂー）』（1938）や『現代の悪霊』（1940）も、知識人の改革運動を描いたもので労働者農民の生活には全く言及しないと批判した。

彼が無条件で賞賛した作品は『ガバ』（1947マウン・ティン作）のみである。多数出回る娯楽作品や、抗日を題材にただけの恋愛小説の中にあって、『ガバ』は異色だと彼はいう。彼は、主人公ガバが大多数の農民を象徴し、ガバの娘の恋人チェッチーが新しい革命勢力を象徴し、文体も独特であることなどから、それを先進的進歩的文学と評価する。『ガバ』全体を覆う皮肉と風刺の矛先が、ラスト近く新生ビルマ再建に燃える革命家チェッチーとガバとのかみ合わない会話を通して、政治活動家と土に生きる人々の意識の断絶にも及ぶことは、見すごされるとしてもである。

「時代を後退させる作家たち」は、次のように結ぶ。文学が描くべきは、少数者ではなく多数者すなわち、労働者、農民、都市在住貧民など抑圧される階級の人生である。文学は人間社会を写真のように表現するだけにとどまらず、社会変革の先頭に立つべきである。それらの階級の立場から、変革の先頭に立って書く作家のみが、時代に見合った作家であるが、そのような進歩的文学はまだ少ない。彼はそのように、当時のビルマ文学と作家の問題点と任務を提示して、さらなる論議を促した。

促すまでもなく『ジャーネーション』1月24日号に賛否両論が掲載された。チーリンは次のように言う。ティンペーミンの忌憚のない批判が爆弾のような衝撃を与えた。しかし真実だから、非難することは筋違いだ。現代作家が社会の大多数である人民の生活を描かず、一握りの支配者階層の享乐的恋愛を微に入り細をうがち描くのは許しがたい。食うに困る大多数の人民にとって恋愛は生死にかかわる重大問題ではない。彼はさらに、ティンペーミンの恋愛小説批判も従来にないものだと述べ、その戦前作の短編「石油」（1938）もビルマ解放への道を示した作品として評価した⁽³⁾。

一方ティンカーは同じ1月24日号で、文学に政治を持ち込むべきでないと反論する。そして、ティンペーミンの意見は共産党的で、党の宣伝文書である。劣悪な作家や作品は批判されるまでもなく自然淘汰される。作家の仕事の大変さを知らず作品を批評する者もいるが、批判から芸術的な大文学が生まれるわけではないと反発する⁽⁴⁾。批評自体に不慣れた作家のこのとまどいは、ビルマにおける文芸批評の未成熟さの水準をも示した。

いま一人の反論者テットウは、テインペーミンの文学観が 'All Art is Propaganda' であり、自分の文学観は 'Art for Art's Sake' だと、両者の立場の相違を明らかにする。そのうえで、性悪な娼婦を描いた彼の短編へのテインペーミンの批判に反論する。テインペーミンは主人公の転落を資本主義制度の犠牲にとらえ、生来の性悪な要素による転落という設定を反人民的だと批判していた。テットウは、反人民的なる用語は共産主義的陰謀から派生した用語であり、主人公のようなケースはよく目にするものだとする。彼は、多数者の典型を描くべきだと考えない。彼の関心は、人間社会に從來存在する事物をリアルに描写することであり、多数者少数者は念頭にない。さらにテットウは、資本主義は望まないが、社会党や共産党にも肩入れしない、この社会の仕組みを学び、貧しさや豊かさの中に生じる人間の心理を批判的に学び取るだけだと、再度自己の立場を明示した。そして、自分を批判したければ一編だけでなく他の作品も読めと、より精緻な批判を促した⁽⁵⁾。

これ以降芸術かプロパガンダか、文学のあり方をめぐって論争は活発となって行く。党内では封じられた批判の自由を、テインペーミンは文学の世界で定着させようと試みた。彼の10年間の政治闘争はひとつの果実となって、ビルマ文学界に新しい息吹を吹き込んだと言えよう。

2 「独立すれば」

新しい文学の創造を目指した第一作「独立すれば」は、その意気込みにふさわしい作品となった。それはビルマの独立に政治的、経済的、階級的な角度から次々と点火した小説として、同時代の作品中傑出している⁽⁶⁾、構成に隙間がなく、ラストには皮肉なひねりをきかせ、ストーリーは繊細で、独立前の雰囲気をよくとらえている⁽⁷⁾などの評価を得た。

作品は46年1月から48年1月のヤンゴンを舞台に、AF P F L第一回全国大会に出席して独立獲得の日に結婚することを誓った男女が、無事結婚するまでを描き、ビルマの国家的運命に都市在住貧民の個人的運命を重ねる。

第一の部分では47年末から46年1月が回想され、高揚から陰りが提示される。大会の熱気の中で、ビルマ貧困の源を英国企業の搾取に見だし、英国企業国有化を夢見る、BC P支持者らしい英国企業労働者チョーミャと、アウンサンを現代の仏陀しながら敬愛するBS P支持者らしい物売りエーニョンが、この期間「小さないさかい」も重ねながら、愛を育ててゆく。その例にあがるのが、47年4月の制憲議会選挙に対する2人の態度の相違である。チョーミャは棄権し、エーニョンはアウンサンへの敬愛からBS Pに投票する。チョーミャの迷いの背景にある、この期間の独立闘争におけるBC PとAF P F Lの矛盾は語られない。

第二の部分で作者は停滞を提示する。48年1月にビルマの主権が移譲されることが確定した日とその翌日の2人の家庭状況は、「慶び」の裏の民衆生活の実態を示す。チョーミャの稼ぎだけでは食べられない一家の台所事情に、物価の上昇が追い打ちをかけ、さらにチョーミャの工場では解雇者が出る模様である。AF P F Lが解雇反対闘争を押し止める中で、慶びどころではな

いチョーミャの脳裏に労働者の工場管理、企業国有化の夢がよぎり、社会主義こそが民衆解放の道であるという作者のメッセージが流れる。結婚費用捻出もおぼつかず、日増しに気が重くなるチョーミャの、「だが、彼は独立の日に結婚することを誓ったのだ。もう後には引けない」⁽⁸⁾という自己への励ましに、問題を内包しながら後には引けない独立の現実が投影される。

第三の部分では、1月4日の独立と2人の結婚で、問題が落着するかに見せたうえで、チョーミャの解雇と、彼の誰にも打ち明けられない秘密である、高利貸からの結婚費用借金という新たな問題を提示して、テインペーミンは、政治的独立を達成しても経済的に大きな問題を残したビルマの姿を表出させる。

「独立したとたん借金したチョーミャは祖国ビルマとよく似ているなあと言われるんじゃないだろうか。独立のイメージをそこねるために奴はわざと借金しやがったとさえ言われかねない。だから誰にも言っちゃいけないだと、チョーミャは固く心に決めたのだった。」⁽⁹⁾

省略される歴史的事件の中に、エーニュンの敬愛するアウンサン暗殺も含まれる。事件が彼女の心に与えた衝撃もありあろうが、エーニュンは現実的で楽観的なビルマ庶民の典型である。独立の理想を美化し、そのイメージに固執するチョーミャとの意識の相違も描き分けながら、テインペーミンは、解放闘争の主体の迷走の中から、大多数の「人民」の立場で、解放を模索するための文学に着手したのであった。

3 独立の光と影

政治的思想的には必ずしも一致しない2人は、新しい家庭作りという共通の目標に向かい協力を余儀なくされる。夫の解雇と秘密の借金は、その経済的基盤をゆるがし、門出に陰りを与えるが、2人が当初の誓いを尊重し、愛情を基礎に協力すれば、困難を乗り越えて行けるだろう。妻の楽観性がそれを暗示する。それはビルマ独立にかけたテインペーミンの期待でもあった。経済的、軍事的に問題を含みながら、政治的独立は果たせた。あとは政治的思想的に必ずしも一致しない組織の集合体であるA F P F Lが、完全独立という共通の目的に向かって協力することが重要である。「独立すれば」は、テインペーミンのそのようなビルマ独立賛歌であった。

独立に先立ちテインペーミンは、その経済的軍事的問題に関して発言している。47年10月のヌ＝アトリ一条約で、ビルマ側が債務解消に断固たる姿勢を見せなかったことを、彼はおよそ次のように批判してきた。英緬戦争に敗北し締結したヤンダゴ条約で、ビルマはすでに何千万もの賠償金支払いが義務づけられた。植民地ビルマのインフラ建設資材は英国から搬入され、英国の言い値で植民地ビルマに売却され、すべて債務として英国大蔵省に記帳された。インドの一族だった1887年から1937年の債務はインドを通して返済せねばならず、それ以降とりわけ戦後「復興」計画や救援物資の費用も含め、債務は14億7000万ポンドにのぼる。さらに復興計画や救援物資は英国系企業の莫大な利鞘を稼ぐ温床になっている。公務員に生活できる賃金も払えず、不当な債務を返済することは本末転倒であり、債務不当、英国資本退去のスローガン

を堂々とかかげるべきだと、彼は主張した⁽¹⁰⁾。

また彼は、ヌ＝アトリー条約に付随するレッシャー＝フリーマン軍事条約の危険性を説いた。マニプール、ハイデラバード、シンガポール、セイロン、雲南などに帝国主義的勢力が進出してビルマを包囲し、ビルマ独立の有名無実化を図っている中で、英国軍の飛行場使用、軍事ミッション派遣によるビルマ軍教育などを定めたこの条約は、ビルマの英国企業の経済活動を守るもので、英国の戦術的勝利である。これらの企みに対抗するためにも、ビルマ国軍を、人民と結び付いた、民族解放反帝思想を解する、連邦共和国の名にふさわしい防衛勢力に育成するべきだと説く⁽¹¹⁾。

このような課題を抱えたビルマの独立の意義を、彼は次のように考える。ビルマは制憲議会が決定した憲法を持つ主権国となった。地主制廃止や農民の土地所有や企業国有化や世界平和などを謳う憲法はまた、18歳以上の全国民が投票権を持ち、人権が保障される基礎を築き、大多数が望む政府を樹立することを可能とした。世界に認められたこの独立は、世界の進歩勢力と外交を開き、世界平和のために共闘できる可能性も開いた。今後は経済的独立獲得闘争のために左翼政党の団結が不可欠だと、彼は主張する⁽¹²⁾。

党のチェックを受けて葬り去られたテインペーミンの原稿は多数に上るが⁽¹³⁾、上記の叙述が党内外の出版物に掲載されたことは、BCPがこの時点までビルマ独立の積極面を公式には肯定していたことを意味する。しかし党内ではすでに、独立評価に関して揺れていた。「独立すれば」は、マウン・クーという筆名で発表された。行間に潜む語られない多数の史実や、抑制の効いた文体には、党の「検閲」をそらすための彼の特別の配慮がうかがえる。この作品は独立評価に揺れ続けるBCPに働きかけるためにも、書かれなければならなかったのである。

第三章 再び小説回帰の前に

1 再回帰の背景—第二の党内闘争—

1月4日の独立記念式典にはタントゥンがBCPを代表して出席したが、カルカッタ滞在中のゴシャルは同日に“Peoples Age”のインタビューに答え、公の路線とは異なる独自の見解をBCP見解として披瀝していた。彼は、ビルマの独立は偽の独立であり、民族資本家階級を代表するAFPFILは中国国民党同様帝国主義の手先であるから、民族解放戦争でこれを打倒すると述べた。中央委員会の承認なくこのような発言をしたゴシャルの懲罰を、テインペーミンは要求するが却下される。3月中旬にゼネストを実施し、武装地域の闘争を農民反乱に拡大し、東南アジア革命の先駆者となるよう提案するゴシャルの報告書「ビルマの今日の情勢と我々の任務」は、新路線として党機関各級に受け入れられていく⁽¹⁾。

テインペーミンは、「ビルマ民族資本家と我々の見解」を中央に送付し、インドの大資本家とビルマ民族資本家を同列視することの誤りを説き、ビルマ的状况に応じた左翼団結を訴えた⁽²⁾。しかし左への揺れは時代の趨勢だった。2月末カルカッタで開催され、タントゥンはじめ6名の代表団が出席したCPI第2回大会が、これに拍車をかけた。CPIはこの大会で「改良主義」

に決別し、「ブルジョアジー政権」と対決して人民民主主義めざし闘う政治テーゼを採択し、タントゥンは「ゴシャルテーゼ」に沿った発言で連帯の挨拶を送り決意表明した⁽³⁾。

「ゴシャル路線」が出るや、A F P F Lは内戦回避に向かって動き、テインペーミンに仲介を依頼する。3月24日にはB S P、P V O、国会議員、少数民族、無党派代表から成る調停委員会が結成されるが、タントゥンは面会に応じなかった。テインペーミンは3月19日、独立によりビルマは植民地から半植民地となった、来るべき革命は民族民主革命である、抗日を共に闘ったB C P、B S P、P V Oなど左翼が団結して、革命の中核になろうと訴える「革命記念日のために」を書き、党中央に送り、議論するよう要求したが受け入れられず、3月26日それを党外の新聞に発表して離党する⁽⁴⁾。

テインペーミンはその後、調停による内戦停止の道に固執した。B C P中央が本気で武装蜂起を準備してはいず、タントゥン自身の中に「ゴシャル路線」実践への迷いがあり、ビルマ民族資本家の反帝的性格の有無やA F P F Lの階級的基盤について論議が重ねられていたことを知っていたからである。3月、タントゥンはピンマナーで大規模な農民集会を開催し、ヤンゴンではゴシャルが労働者の解雇撤回闘争を契機にゼネストをめざしていた。この動きが武装革命に連動することを懸念したA F P F L内閣は、スト工場でB C Pが武器を集めているという情報を受け、蜂起を未然に防止すべく、3月27日、スト指導者や共産党員逮捕を開始する。地方指導者は多数逮捕されたが、事前に内部情報を入手した中央委員会は地下に潜入した⁽⁵⁾。翌28日緊急政治局会議で武装蜂起が決定され、4月2日バゴウのパコンヂーで蜂起が開始する⁽⁶⁾。

一触即発の状況があったにせよ、内戦未然防止のための逮捕がなし崩し的に蜂起を導き、その後半世紀も続く内戦が開始した。こうした事情も、テインペーミンに左翼勢力の関係修復への幻想を抱かせたのである。

2 再回帰の背景 2－党外闘争－

48年4月5日、地上左翼であるB S P、P V O代表と首相ウー・ヌらは、テインペーミンと、彼の3月19日論文の15項目提案について論議した。これをもとに地下勢力と交渉して和平を獲得するつもりであった。合意直前P V Oが対案を出して抵抗し、5月25日、連名でなくウー・ヌ個人の名で14項目の和平提案が提出される⁽⁷⁾。P V Oは、提案を支持する黄色P V Oと反対派の白色P V Oに分裂し、6月25日後者は地下に入った⁽⁸⁾。地下勢力が武装解除し、地上で協力して左翼国家建設するよう呼びかけるヌ提案は、内戦を階級闘争ととらえるB C Pには解党提案と解釈されかねないものであった⁽⁹⁾。

左翼団結の第一の試みは挫折した。第二の試みとして、テインペーミンら内戦反対派共産主義者、国軍、B S P、黄色P V Oは、7月16日左翼組織評議会を結成した。評議会は7月31日まで6回会議を持ち、テインペーミンの提案する報告「団結によって建設せよ」を討議して⁽¹⁰⁾承認した。評議会結成の背景には、首相ウー・ヌの言動からビルマ「左傾化」を読み取った英国

の憂慮発言、それに呼応したカレン族の不穏な動き、そしてビルマ政府のトップである防衛大臣やビルマ国軍のカレン族司令官や内務長官らの結成した国家安全評議会が、BSPやPVOを排除した政党色抜きの暫定政府樹立をウー・ヌに要求するなどの一連の動きがあった。評議会は、議会制民主主義を無視した右派による権力奪取の策動を未然に防ぐため、15項目提案の復活、マルクスレーニン主義政党合併、地下BCP本部説得のため獄中から急遽釈放された3名の共産党員の派遣を決定し、右派に対抗できる新しい閣僚人事が考えられた。しかし人事を巡る個人的トラブルが続出し、ヌが評議会人事提案を拒否し、閣僚人事刷新計画は座礁する⁽¹¹⁾。

評議会内部では決定については合意を見たが、その他の点では一枚岩ではなかった。BCPとの調停に固執する者もいれば、共産党と右派の危険性を同列視する者もいた。右派の企み粉碎のために、議会制民主主義の枠内での闘争を目指す者もいれば、クーデターによる政権奪取を夢見る者もいた。そのような中で焦燥した評議会の一部がクーデター計画に着手した。評議会影響下にある武装部隊が権力を奪取し、左翼統一連合政府を樹立し、地下のBCP等と和平交渉し、彼らをも閣僚に取り込み、右派の危険を完全に粉碎してから、幅広い左翼勢力による民政に権力を委譲するという計画である⁽¹²⁾。

テインペーミンは計画立案には参加しなかったが、途中から乞われて加わった。参謀次長ネーウィンは軍事面の、テインペーミンが政治面の責任者となった。しかし決行の時点でネーウィンは加わらず、参加するはずの大隊の多くも動かず、テインペーミンも直前で決起を踏みとどまり、若干の大隊その他が地下に入った。BCP内で民主主義的権利を追及し、平和的手段による社会主義建設を夢見たテインペーミンの矛盾的行動を彼自身は、次のように述べる。

「私は団結と平和路線に固執していた。その路線ゆえに共産党の内戦路線と袂を分かった。議会制民主主義的方法を重視してきた。しかし暫定的に議会制民主主義的方法を放棄したのである。武器による権力奪取に偏向して行ったのである。おまけに、軍の事情に全く通曉しないのに、軍が権力を奪取する企てに参加する事を承知したのは、自分の不得意な芝居を演じるも同然であった。一朝一夕にしてその過ちに気づき、イエートゥッやゼーヤたちに同行せず、ミンガラドンからヤンゴンに戻って来たのだった」⁽¹³⁾

曖昧な表現ながら、衝動的行動が、その心の中で汚点と意識されたのは確かであった。48年8月12日彼はクーデター連座の罪で逮捕され、ヤンゴン刑務所に服役後、49年7月17日釈放される⁽¹⁴⁾。

「1年近い投獄を辛いとはあまり思わなかった。48年の共産党の反乱の前に私が下した路線から、戦術的に偏向してしまったので、私の政治的威信に傷が付いたのが、非常に辛かった。和平、団結が崩壊したとき、崩壊のすべてが私のせいとされた。」⁽¹⁵⁾

小説への回帰は、彼にとって失われた威信を取り戻す砦の再構築をも意味したのである。

第四章 再び小説へ

1 『開けゆく道』

獄中で堰を切ったように執筆された作品⁽¹⁾のうち、まず出版されたのは49年5月、長編『開けゆく道』⁽²⁾だった。それは同年9月に再版された。新たな出発を期して、この初版でテインペーミンは、それまで使用した（テッポンヂー）テインペーから、1940年に急死した母ドー・ミンの名を取ってテインペーミンに改称した。

作品舞台は妻の出身地で下ビルマのエーヤーワディー・デルタのチャーボン⁽³⁾である。チャーボン一帯は「すべて異状ありません」の主人公の故郷として、また「裏切り者だとは」の舞台としてその後も使用された。テインペーミンは46年3月以降とりわけ12月の再学習命令以後しばしばチャーボンを訪れていた⁽⁴⁾。

初版序文で彼は、執筆に至る長い道程を詳述する。彼は学習期間中AF P F LとBC P不和の原因を再検討し、この期間を背景とした映画製作を思いついた。エーワン映画社のウー・ニープ監督と協議し、粗筋を党政策委員会に送付して脚本執筆許可を求めるが、タントゥンが理由を明示せず不許可とした。このことに「私は耐えられなかった。講義するな、人民の中に入るな、演壇に上がるななどの、変則的な、党の伝統に反する規制で、党が私をコントロールするのには従った。しかし『AF P F LとBC Pは団結せよ』という、当時のスローガンに見合った脚本を書くなという規制には、従う意志はなかった」⁽⁵⁾と彼は述べる。

チャーボンで彼は「新しい人生」とのタイトルで脚本を完成し、47年7月17日ヤンゴンに戻って、ウー・ニープに渡した。監督の努力にもかかわらず、事情が許さず、脚本は宙に浮いた。そこで彼は、脚本の小説化を決意した。故郷上ビルマの小説舞台化に慣れていた彼は、下ビルマのチャーボンを舞台にした脚本の小説化に心もとなかった。彼は舞台を上ビルマに変えるべく、帰郷の許可を求める。いったん許可は出たものの、脚本執筆が判明するや、それは取り消された。7月19日アウンサン暗殺後、彼は再びチャーボンに戻り、農村を回って執筆に努めた。しかし執筆できないまま投獄を迎えたのであった。

この作品の時代設定は「独立すれば」からややさかのぼる。第一部8章は、45年6月抗日勝利の喜びの後、BC Pの優勢に危機感を持つBS Pが、BC P色の強いた衆組織から分裂し、新たな組織を誕生させる45年6月までである。第二部9章は、ゼネスト後AF P F Lが権力の一部に取り込まれて革命の潮が引く46年9月までである。第三部12章は、1年後の独立獲得への期待からAF P F LとBC Pが団結の兆しをみせる47年6月までである。団結の要であったアウンサンの暗殺直前で閉じられるのは、テインペーミンが脚本の設定を据え置いたためだった。

各局面で生じる事件の多くは事実にもとづいている。団結が壊れた後カニ村をインド兵が襲撃する第三部のクライマックスはピンマナーの事件を、結末を飾る左翼団結耕作祭はチャーボンのラムワ地域の経験を取り入れ、そのほかタウンゲー、ワケーマ、バゴウ、タナッピンなど各地の事件も総合して挿入された。

2 人民群像と戦後ビルマの階級構成

テインペーミンは、『開けゆく道』で時代のうねりの中の人民群像を描き出し、複数視点から時代の再現を試みた。それまでの彼の長編の枠組みを脱し、同時代の政治問題に正面から切り込み、新しい小説の可能性を開いた点で銘記すべき作品となった。

抗日活動の中で愛を育てたB S Pの軍人とB C Pの女性教師を核として、彼らにかかわるB S P、B C P、P V O活動家、小作農民、農業労働者、自作農民、地主、地主の娘、機動船主、喫茶店主、知識人はじめ時代の典型的人物20名近くの、2年間の政治の波に対応した思想と行動を提示し、これら善意の人々を離合集散を越えて地主制反対耕作祭に合流させていく。テインペーミンはこれら登場人物をビルマ社会の各階級の様相を取り込んで創造した。そこには、46年7月B C P中央が承認しなかった彼の書記長報告「ビルマのための新民主主義」⁽⁶⁾で叙述される戦後ビルマの階級構成観が反映される。

報告はまず住民を革命勢力と反革命勢力に分け、前者をさらに労働者、農民、都市民主勢力、知識人の「四階級」に分類する。

第一の労働者階級に関して、ビルマに近代的資本主義は発達せず、近代的プロレタリアートは存在しない。鉱業、運輸、通信労働者はいるが、即戦力になりえない。精米、製材、ロープ、マッチ製造など中小製造業労働者は、ビルマ人インド人合わせてもたかだか20万で、労働運動も脆弱だと指摘する。

第二の農民階級は、ビルマ最大の階級だが、一枚岩ではない。それは、1. 農業労働者、早乙女など無産農民、2. 田畑は所有しないが水牛や牛馬を所有し1を雇用する小作人、3. 自らも耕作し、余った土地を小作させる土地所有農民に三分され、そのうち2が最も戦闘的部分である。テインペーミンは、とりわけ農民階級が労働者階級の同盟者以上の役割を持つと述べ、「プロレタリアートの前衛」なる言葉に拘泥してその重要性を理解しない教条主義を批判した。

第三の「階級」は都市在住貧民とプチブルジョアジーからなり、最も複雑な部分である。それは、物売り、運転手、事務員、ブローカー、手工業者、家内工業経営者などだが、労働者農民ほど革命的ではないとされる。

第四の「階級」は学生、教師、弁護士、作家、医者など知識人で、戦争や世界的な運動のうねりの中で革命勢力になったとされる。

一方反革命勢力は、地主階級と買弁資本家階級である。前者は金貸しと米商人を兼業する場合が多く、農民搾取においては英国帝国主義の同盟者である。後者は英国と商品取引する独占ブローカーである。ビルマ人も若干いるが大半はインド人中国人であり、ビルマの解放を望まない。

革命勢力と反革命勢力の中間に民族資本家階級が存在する。ビルマ民族資本家は精米、製材、映画、印刷など弱小事業に従事する。今後プチブルジョアジーが発展し、あるいは買弁資本家階級が出資して事業を起こし、民族資本家に移行する可能性がある。

テインペーミンはこのように分類したのち、二つの誤った民族資本家観を戒める。第一は、民

民族資本家を買弁資本家と同列視し、同盟者となり得ないと考える左の過ちであり、第二は、民族資本家は弱体で英国帝国主義との矛盾が大きいと、同盟者だときめつける右の過ちである。そして、民族資本家は仮の同盟者であり、彼らの資本で近代工業を起こすよう、彼らと英国帝国主義との矛盾が生じれば闘争するよう援助しながらも、彼らが解放勢力から逸脱すれば糾弾するという両面を使い分けるよう主張する。

ティンペーミンは「四階級」が政治権力を奪取し、新民主主義共和国建設をへて社会主義制度に移行することを展望し、「階級闘争やプロレタリア独裁をおうむ返しに唱えて団結を破壊する教条主義者」を批判した。これが党中央と相いれなかったのである⁽⁷⁾。

党の左偏化とA F P F Lとの関係悪化は、次第に民族資本家と革命勢力の溝を深めて行った。48年1月の「ビルマ民族資本家と我々の見解」における彼の微妙な発言がそれを物語る。地主階級と結託し、大半が工業建設の意欲なく貿易発展のみを目指すビルマ民族資本家は、近代工業資本家ではない。彼らは、革命勢力が団結すれば根こそぎ倒せる弱体な資本家だとティンペーミンは述べ、それを代表する政治家としてウー・ソー、ウー・バペー、ウー・ティントゥッラをあげる。彼らと異なりアウンサン、ウー・ヌ、ボウ・レチャー、P V O、B S Pなどは、「強大なプチブルジョアジー・人民」を代表し、人民の団結が強ければそちらの側に、弱ければ帝国主義者の側に揺れる性格を持つ。B C Pが彼らを民族資本家と見ることは、彼らを敵視し同盟しないことを意味すると、彼は批判した⁽⁸⁾。

ピャーボンという小宇宙における「四階級」の紆余曲折の末の団結を描いた『開けゆく道』は、ティンペーミンの日の目を見なかった「ビルマ革命の展望」を語る特異な小説であったともいえるよう。

3 作品の評価をめぐる

『開けゆく道』49年8月第2版序文で、ティンペーミンは次のように述べる。自分としても技術的にいささかの不満が残った。出版後知人からいくつかの欠陥が指摘されて、第2版では一部修正、削除、補充した。そのほか文体に関する批判もあったが、彼は形式は内容に従属するから、内容の方を批評してほしいと述べる⁽⁹⁾。

『開けゆく道』には、左翼統一の崩壊や内戦を描く他の作家の著作より深みがあるという肯定的な見方や⁽¹⁰⁾、「鼻持ちならない理想主義」で「個人的見解の正当化」⁽¹¹⁾といったイデオロギー的反発や、叙述部分が多すぎ小説的要素が弱いという批判⁽¹²⁾もある。

批判の中ではダゴン・ターヤーの「1949年の小説はなぜサーペーバイマン賞を与えられなかったか」⁽¹³⁾が詳細である。ターヤーの論点は二点ある。第一は50年3月、49年度サーペーバイマン賞が該当作品なしと発表されたことに関する選考委員会の選出基準への疑問である。第二は作品自体の問題である。

サーペーバイマン賞は、ビルマ翻訳文学協会（47年8月創設ウー・ヌが会長）が一年の優れ

た文学作品に与える。第一回の48年度受賞作は、知識人の農村改革を描く『空の下の地』（ミンアウン作）だった。49年度に該当作がなかった理由は、水準に達しない作品、ならびに水準に達するが論議が生じる作品は忌避すべきだという協会執行部決定による。ターヤーはそれがふに落ちない。論議の生じたものには授与しないという「原則」と、ビルマ文学の発展という協会の目的とのかかわりが釈然としないからである。

ターヤーは独自に、49年の候補小説40作を丹念に検討した。大半が恋愛小説で、その他若干がミステリーであった。前年度の『空の下の地』に準じた水準を満たす作品は三作であった。このうち二作は愛と政治をからませたものだから、論議が生じるいわれはない。残る一作の「政治小説」が、水準に達するが論議が生じて受賞に至らなかった作品だと彼は推測する。それが『開けゆく道』であった。文学は人間関係と切り離せるものではなく、政治は人間社会全体にかかわる人間関係の総体だから、小説に政治性を入れるべからずという規定があるならばそれには同意できないと、彼は協会の態度を批判した。

彼はさらに、作品そのものを批判する。何の変哲もない恋愛ものやミステリーものと比較すれば、ビルマの時代状況と政治状況を描く点で『開けゆく道』は評価できる。しかし第一に歴史が証明するように、テインペーミンが示した統一団結路線は現実に実現不可能である。団結は互いの資質が等しくなければならず、資質の異なる者同士、相反する者同士は共に行動することが困難で、一時的に団結してもすぐ崩壊の運命にあり、その場合は団結せずにいる方が正しい。ターヤーはそうように主題自体を批判した。

第二に彼は、形式に関して批判する。『開けゆく道』はテインペーミンの以前の小説と比べ粗削りである。自分が主張したい内容に表現形式がかみ合っていないというのである。従って、翻訳文学協会は、作品の政治性を問題にするのではなく、作品が「元共産党指導者の宣伝文書」か、それとも人間社会の政治的動向をありありと表現する力があったのか、文学としてどれほど芸術的であったのかを問題にすべきだったと彼は結ぶ。

すでにテインペーミンは、第一に長期小説休筆による筆の鈍り、第二に脚本の小説化という技術的な不自由さ、第三に下ビルマになじんでいないことの三点を小説執筆上の困難としてあげていた⁽¹⁴⁾。『開けゆく道』の政治性が強烈な印象を与えること自体が、芸術作品としての弱さを示していたといえよう。たしかに、強力な執筆動機のもたらす性急さは、客観的であるべき叙述部分にところどころ作者の慨嘆を挿入して、文体の統一を乱し、現実の重みに虚構が圧倒されかねない状況を呈する。彼は「人民勢力」の人物群像を意のままに操ろうとして、最後に、彼らを強引に理想的結末に導きすぎたようであった。

なお、ビルマ式社会主義をかかげた軍事政権が地下の反政府軍と和平交渉に乗り出す63年6月、『開けゆく道』第三版が出版された。テインペーミンはその序文で、ビルマにおける社会主義実現の可能性に疑問を持つすべての人々にこの本が回答を与える、この本は我々全民族の未来を描くと述べている。⁽¹⁵⁾『開けゆく道』は、国軍によるビルマ社会主義建設において、イデオ

ロギー部門で動員されたのである。その意味でも『開けゆく道』は時代の先を駆け抜けた小説であった。

第五章 人民文学

1 文学論争その後

49年8月ティンペーミンは、「題材を探す作家たち」で次のように述べた。多くの作家が人民生活と掛け離れたものを書こうとして題材を探し、書けずにいる。彼らは人間の尊厳よりも、非科学的な怪奇妖怪変化、あるいは1000人に1人が一生一度しか出会わない希有な事柄を書こうとする。彼らは頭で考えることをやめ、人民の中に入るべきだ。人民は多数で、各自の問題も多数であり、解決法も多様だから、題材は必ず見いだせる。人民こそが作家とすべての知識人の源流だと述べて彼は、刑務所で見聞した具体例をあげて示す⁽¹⁾。ティンペーミンにとって、刑務所生活は題材の泉となったのである。

49年10月、彼は48年1月の文学論争を継承し、発展させた「今日の人民文学の諸問題」⁽²⁾を発表した。それによれば、48年以後大作家たちは自己の威信が傷つかないように、論議に加わらない申し合わせをしたが、テットウやティンカーがあえて論議に加わった。文学の立脚すべき立場をめぐる論議は活発で、さらに綴りや訳語はじめ、細かい手法に関する対立も生じた。これらの論議から主要矛盾を取り出し、主要でない矛盾が重要な問題点を隠蔽しないよう、論議の混乱を整理するためにこの評論は書かれた。

彼は第一に文学の現状を明示するため、出回っている作品を、1. 反動（背徳）文学、2. 新ブルジョア文学、3. 人民描写文学、4. 人民革命文学または人民文学に分類し、具体例をあげて定義づけた。それによれば1は、アクションや刑事事件や占いや迷信や怪奇現象や扇情的恋愛などを扱い、特権階級の利益を擁護し、人民を牛馬のようにみなし、人民解放勢力を愚弄する作品である。

2は、内容形式が新しい、知識人プチブルジョアジーの上層部、民族資本家もしくは「新資本家階級」の利益擁護の文学で、民族資本家の性格を反映し、進歩的側面と反動的側面を持つ⁽³⁾。

3は、2のように人民を嘲笑せず、人民の人生を描写してみせるが、その困難の根源を探り批判し、解決への解答を導くには至らない文学である⁽⁴⁾。

4は労働者、農民、都市在住貧民、その他大多数の人民の立場から書かれ、人民の解放を組織する文学で、4の作家はその創作だけでなく、3の作家と固く同盟し、2の動揺部分を批判しつつ進歩的部分と手を握り、今日のビルマ文学の反動的部分と闘う任務がある⁽⁵⁾と、彼は定義した。

彼は第二に、マルクス主義を信奉する作家の中の一群が、新しい内容より新奇な文体や新造語の創作にのみエネルギーを費やすという「ゆきすぎ」を犯していることを批判した。とりわけ詩の分野において、ダゴン・ターヤーを筆頭とする「新文学」⁽⁶⁾グループが、新文学、人民文学

を唱えながらも、新語を鰭詰めし、英語の直訳をちりばめ、法則を無視し、多数者に理解されることより、自己鑑賞のために書くことは反人民的であり、このグループが、内容的にも人民の状態を十分描かず、描いても、闘いに加わる自覚的労働者農民の描写に至らないのは、彼らが人民から遊離しているからだと指摘する⁽⁷⁾。

彼は第三に、内容と形式の統一された高度な芸術性を持つ人民文学は民族的形式を用いるべきだと主張した。それによれば、芸術は人民の闘いの歴史から生まれ、人民の精神生活には民族的伝統芸術が脈々と波打つがゆえに、民族芸術の拒絶は人民からの遊離をも意味する。進歩的側面と反動的側面を見分け批判的に摂取して、進歩的民族文化を創造すべきであって、新形式の考案も、民族文化との脈絡なしに唐突に創造することなく、人民の理解可能な範囲で必要ならば大胆に考案するよう彼は促した⁽⁸⁾。

彼は第四に、文学のイデオロギー性に言及する。すなわち、ビルマの作家は半封建的文化や半植民地的文化のもとに生育し、家庭、学校教育、メディアなどを通し、支配階級のそのような文化の影響を受けてきた。人間社会は支配階級と支配される階級に分かれており、その外側に存在することはできない。イデオロギーがないかに見えるところには古いイデオロギーが既に存在している。人と生まれ、社会体制に組み込まれれば、イデオロギーと無関係に生きられない。どちらの階級にも属さないという作家は自己を欺いており、純粋な芸術を主張する人々は古いイデオロギーに支配された階級を擁護していることになる」と批判する。

彼は第五に、人民の新しい民主主義の建設、つまり人による人の搾取、民族による民族の搾取のない、全人が能力に応じて働き、働きに応じて収入を得る社会主義制度の建設に向けて歩むという事業に人民文学が参加するために、三つの組織的任務を提案する。読者の中に、人民の利益を自己の利益と考え行動する知識人が生まれるよう、人民文学を基礎として映画演劇などから人民文化が誕生するよう、人民の中から読者が生まれるよう組織扇動するという任務である。

テインパーミンのこの提言は、むしろ人民文学派に新たな論争を巻き起こし、その後50年代初頭にかけて応酬があった⁽⁹⁾。ダゴン・ターヤーらは、各作家ごとに独自の形式があってしかるべきで、進歩的内容と熟達した技巧が結合してこそ新しい文学が芸術性を持つと反論した⁽¹⁰⁾。上述のテインパーミンの『開けゆく道』の結末部分がビルマ伝統芸能を取り入れた耕作祭にページ多数を裂いたのは、テインパーミンのいう人民文学の民族性を具現化するためであった。しかしその部分が、冗長に流れ、作爲的印象をより強めたことは否めない。上述のターヤーによる『開けゆく道』批判も、この論争の延長線上にあり、むしろテインパーミンの「新文学」批判への回答と解釈することができよう。

2 「すべて異状ありません」 (1949)

テインパーミンがこうした論議をどのように受け止め、「人民文学」をその後どのように創造したかは、「今日の人民文学の諸問題」と同時に発表された「すべて異状ありません」⁽¹¹⁾から

うかがえる。

テインペーミンは主張通り人民の中に題材を求め、ヤンゴン刑務所に服役する2800名の囚人の一人マウン・ティッを主人公に選び、彼の視点で物語を語らせた。彼はチャーポン近くの村の農業労働者である。仕事がないので、借金がかさみ、酒の勢いで友人タイマウンと野盗を働いて、三年の刑を受け、模範囚として1年8カ月に減刑され、あと5カ月の刑期を残し、Aクラス政治囚テインペーミンの世話係に任じられている。

作品は48年末頃、5カ月刑期を残す囚人の減刑釈放のうわさを彼が耳にした日から、彼が出獄して故郷へたどり着くまでの一週間を描く。有頂天の彼は、まず将来を夢想する。彼はテインペーミンと日常的に接する中で思想的影響を受け、地主制度廃止と土地分配を実現する土地改革法に希望を託す。彼はまた、入所当初の民主的囚人関係、独立の日の恩赦を要求するストライキ闘争、敗北後の非民主的囚人関係の復活、政治囚世話係抜擢後彼を悩ます同僚の嫉妬、雨季明けの灯祭りの囚人劇団による芸能上演など1年3カ月の刑務所生活を回想する。そうした彼の思考を破るのが、点呼に応じて次々沸き起こる「すべて異状ありません」の声である。逃げ出せるわけでもない刑務所の4重の壁の中の点呼は、改めて彼に刑務所の非人間性を思い起こさせる。

主人公の思考や行動は三人称で語られ、その合間に会話が挿入される。とくに脇役として登場する作者の存在は重要である。『開けゆく道』では「政治家テインペー」は、人々の口に乗るだけで、直接姿を表さなかった。一方マウン・ティッはテインペーミンに、自分の過去を語り、愚痴をこぼし、テインペーミンは彼を戒め、励まし、土地改革実現の前提たる和平や政治的理想をかみ砕いて語る。これらが作品前半の、うわさが正式発表となるまで右往左往するマウン・ティッの三日間に挿入される。

出獄直前、僧侶や長老が垂れる長い訓戒への彼の反発は、デルタ農業労働者にとってのビルマ社会規範の空洞化を意味し、出獄後のシュエーダゴン・パゴダ参拝は彼らの信仰の水準を示す。彼らは敬虔な祈りは捧げるが、金箔に満ちたパゴダに対する貧乏人の布施の必要性を感じず、手ぶらの参拝を不謹慎だと感じない。それは彼らに、ビルマ仏教徒特有の因果思想を深く考える習慣がなかったためだと説明される。

希望に満ちた前半に対して、タイマウンとたどる故郷への道程は、希望から絶望への過程である。カレン族とBCPの支配下にあるデルタを往来する船の出港を待つ3日間、町を見物する二人は逡巡の末、なけなしの金をはたいて鎌を一本ずつ購入する。鎌は彼らの更生への決意と希望を象徴する。出港後、水面を見たマウン・ティッは、喜びの波が心に押し寄せ、水が彼らデルタ農民の血肉に染み込んでいたことを再発見し、その水の延長線上にある村へと心をはやらせる。

チャーポンからさらに苦勞して舟を乗り継いだ2人は、内戦で廃墟となった村に戻る。鎌を手に入れた2人が向かった焼け残りの一軒家は、2人に武器を与えて野盗を働かせ、自分は逮捕を免れたコウ・ポウチュエーの家であった。歩いて行くマウン・ティッの耳に突然響くのは、異状があるべくもない刑務所内で耳慣れた「すべて異状ありません」の叫びである。異状に満ちた刑務所の

外で、彼らが生産のための農具を犯罪の武器に持ち替えるしかないことを暗示して、テインペーミンは以下の言葉で結ぶ。

「ああ、マウン・ティットタイマウンは無事村に帰れたのだろうか。アメリカ大使館からは『ビルマ共産主義者ナンバーワン』、ビルマ連邦政府警察、高等裁判所からは『恐るべき共産主義者』、タキン・ソウからは『日和見主義者』、多くの国民からはテッポンヂー・テインペーと呼ばれたこのわたしは、こんなことをしばしば憂えたのであった。ああ、マウン・ティットタイマウンは無事村に帰れたのだろうか。」⁽¹²⁾

「すべて異状ありません」は、戦後文学史上初の監獄小説とされる⁽¹³⁾。戦後の非常に有名な短編であり、人物の心理描写やそこに反映された時代、階級の状態の描写において明快な散文体だとも評価される⁽¹⁴⁾。この作品は、人民を主人公とし、人民の困難の原因を明らかにし、その解決への道を指し示した点では、作者の言う人民文学の条件を満たしたと言えよう。ただしその解決法の適切さへの説得力には陰りがある。『開けゆく道』発表時より、内戦は一段と深化し、49年10月には、政府は英米からの援助で反政府軍の掃討に乗り出す決意をしていたからである。この作品は『開けゆく道』以上に作者の直截的主張を挿入している点で、テインペーミンの焦燥と絶望を物語り、そのためこれが彼の言う内容と形式を統一した高度な芸術性に合致するかどうかという疑問を残すのである。

3 「裏切り者だとは」

テインペーミンの34年から66年までの短編小説を収録した『テインペーミン短編小説選集』（1966）を分析批判したマウン・スンイーは、「すべて異状ありません」と50年2月発表の「裏切り者だとは」の2編だけが彼の政治的立場を直接反映していると述べ⁽¹⁵⁾、ミルンは、「裏切り者だとは」が彼の選集の中で最も明白な政治的言明を含んでいると指摘する。それは内線を闘う反政府グループの政策と態度へのテインペーミンの幻滅を詳しく説明し、彼の平和と統一への計画を再度正当化しようとしているからである。そしてそれにもかかわらずこの作品が、始まりから結末までミステリー的暗示によって、物語を効果的に語り、緊張を持続させると評価する⁽¹⁶⁾。

「裏切り者だとは」は45～49年を時代設定に用いる。語り手は作者自身である。49年1月初旬夕刻ピャーボン西南端を散歩中の作者が、48年頃まで共産党の解放村であった川向こうのトゥーミャウン村を遠望しながら、その村を訪れた当時を回想するうち、村の元農民同盟書記長ニュンセイと再会する場面が導入部である。

ひきつづき、詳述されるニュンセイの過去は、彼が元僧侶で、村で最も学識のある俗人で、人格円満人望厚く、手先が器用で、村の有能な指導者で、しっかりものの母に頭が上がらず、母の勧めで姪ほど年の離れた働き者のフラシンと結婚し、妻を教育して村の女性指導者に育て上げる経緯を物語る。ニュンセイ像には、伝統的なものと革命的なものの融合という作者の理想が

投影される。彼らの運命を変えるのは内戦である。

作品の大部分はニュンセイと作者の会話である。ニュンセイに、内戦が破壊した人間関係の顛末を語る気を起こさせたのは、彼が作者の説明する内戦停止・和平への道筋に希望を見いだしたことによる。作者はそれ以上は多くを語らず、聞き役に徹する。準備もなく内戦路線に突入した彼らの村に、オルグに入ったBCP上級機関とニュンセイの意見の対立から、人間関係とりわけ夫婦関係の破綻が始まる。ニュンセイは党の武器接収に反対し、野盗から村を防衛するための武器を残すよう主張する。彼はまた、党が小作人の耕作地や水牛や牛を没収し、農業労働者の小作人からの借金を帳消しにして小作人の収入源を閉ざし、米の売却を凍結したことに抗議し、カレン族の大地主に対抗してBSPやPVOと共闘することを主張する。村人の多くは彼をひそかに支持するが、武装共産部隊の前にはなすすべもない。彼は「裏切り者」で政府の犬として党を除名される。赤軍女性兵士の責任者となったフラシンはニュンセイを批判し、町から指導に来た上官と親密となる。人民の現状を無視した方針を押し付ける党の、人民に対する裏切り、その党の路線に盲従してニュンセイを捨てたフラシンの裏切り、それら二重の裏切りのゆえに、彼は荷物をまとめて密かに村を立ち去る。

結びの部分でニュンセイは、カレン軍と政府軍の挟み撃ちで苦戦する共産軍からフラシンを救出する決意を明らかにする。無鉄砲さを諫める作者に彼は、危険から救出した後は彼女の選択に任せるが、賢明な彼女が党の路線の過ちを理解すれば彼の元に戻ってくる希望があると答えて出発する。その2日後、手配中のトゥーミャウン村BCP指導者ニュンセイが反逆罪（裏切りの罪）で逮捕されたとの記事が作者の目を引く。党からだけでなく政府からも、この善良で誠実な人民が「裏切り者」呼ばわりされたことへの作者の驚愕によって、作品は閉じられる。

「裏切り者だとは」は、一小作農民の45～49年の経験を通して、作者自身のこの時期の栄光ある孤立的闘争を回顧した。村人の利益のために臆する事なく党指導部に意見を述べて、民主主義的権利行使につとめ、妻の救出という不可能に近い闘いに挑む途中で逮捕されるニュンセイの姿には、恐るべき粘り強さと楽観性で党内民主主義の可能性を追及し、それに敗れた後も、左翼統一の夢を追い続け、クーデターで投獄された作者自身が投影されている。

45～49年の史実を背景とした「裏切り者だとは」が、現在再版を許可されないのは、現軍事政権がいまなお、この時代にかかわる叙述に多大な関心を示していることを意味している。にもかかわらずこの時代に関する詳細な記録や研究が国内で出版を許されないのは、この時代の諸事件が現代ビルマ政治への教訓や警告を含んでいるからにほかならない。そのような現在、ティンペーミンのこの期間の苦闘を農民の視点で再現した「裏切り者だとは」は、時代の証言録としても貴重な存在である。文学への権力のこうした過敏な介入は、文学が権力を脅かす力を持っていることの証しにほかなるまい。

結び

テインパーミンは『人民時代・人民文学』という題で自伝第三巻を執筆したが、検閲で不許可になった⁽¹⁾。彼の死後の81年、それは『文学的生涯3』との題で出版された。それは彼の41年から49年を中心に扱っている。しかし45～49年に関しては、504ページ中最後の4ページで簡単に記されるだけである。彼が人民の中に題材を求め、人民の解放のために闘争し、人民文学を奨励し、創造した45～49年こそ「人民時代・人民文学」の題にふさわしいにもかかわらずである。本稿はテインパーミン自身の発言に依拠して、この時代を背景にした彼の小説の意味を考察したいわば、『人民時代・人民文学』続編である。百人百様の政治体験が存在するこの時代に関しては、まだ検討すべき事柄が積み残されている。別の視点から考察することによって、テインパーミン像もより深められるはずである。それらがビルマ人自身の手で自由に描き出される日の到来が期待される。

この時期のテインパーミンの膨大なエネルギーは、BCPの内外での闘争に費やされた。反ファシズム闘争勝利の直後、そのけん引車であったBCPは同時代の誠実なビルマ人の多くを魅了し、BCPの指導する革命によって「理想社会」が到来するかに思われた。しかし、秘密活動時代の活動スタイルの名残を免れないセクト主義、上意下達の官僚主義、そして教条主義、事大主義は、善意の人々を翻弄し、その人間関係を歪めて行く。テインパーミンが活動領域を狭められ、言論の自由を奪われ、人権を蹂躪されてもおお驚異的なしぶとさで、ぎりぎりのところまで党にとどまったのは、異論を認め、論議を尽くし、実践活動の中で誤謬を訂正するという党内民主主義の可能性に賭けたからであろう。党内民主主義や批判の自由は幻想であり、異論を排除し、均質を指向する自浄作用なき集団が、自壊の道をたどったことはその後のビルマの歴史が証明する。

BCPへの幻滅の後遺症として彼は、党のイニシアティブに依存しない左翼統一による革命幻想へとかりたてられた。左翼統一は、彼が求めれば求めるほど遠のいた。かつてその畏友ウー・ヌが、テインパーミンの政治への執着を、自分に惚れた娘に見向きもせず、自分を憎む娘の後を追いつく男⁽²⁾に譬えたが、この政治という言葉は、むしろ左翼統一という言葉に置き換えられるべきであろう。「左翼統一」の理想のためならばクーデターも辞さないという発想はその心の奥底にいったん封印されたが、62年以後の国軍によるビルマ式社会主義建設時に復活し、再び政治的敗北に彼を追いやるのである。

政治の世界で実現されなかった理想は、文芸評論や創作に注入された。なかでも彼の幻想を膨張させたのは小説である。現実の世界で実現不可能なことが、小説の中でいかにも実現可能な幻想として再生された。現実から創造された虚構が再び現実反作用を及ぼして、幻想をふりまいた。政治活動が文学を生み、文学が彼の政治活動の原動力となった。その典型的な時代が45～49年であった。

テインパーミンは党派性を重視し組織に忠実であろうとし続けたと、政党に属さなかった左翼同調者ダゴン・ターヤーは言う⁽³⁾。無原則的統一主義者の汚名をものともせず、テインパーミ

ンが強力な統一組織を求めたのは、ビルマ人民の解放、社会主義建設という大義名分のためであった。人民解放のために彼は組織の抑圧に耐えたのである。彼が自己の閉塞を人民の閉塞に重ね合わせ、自己の魂の解放ぬきに人民の解放があるべくもないことを悟るのは、その後25年も先のことであった。

注

序

- (1) B-13、14。発行はビルマ式社会主義時代はば全作家を擁した文学労働者協会の流れを汲む文学ジャーナリスト協会。有名作家大半が未加入のビルマ唯一の作家組織。
- (2) 98年8月の取材による。言論出版状況はJ-17、18、19参照のこと。
- (3) J-16参照のこと。

第一章

- (1) J-16 p. 135-136
- (2) B-7 p. 350。サヤーウン・サントウンによる。
- (3) E-6 p. 8, p. 10-11, J-16 p. 136
- (4) B-17 p. 62
- (5) キンチーチャー（45年入党。テインペーミンの妻。97年8月1日、98年8月15日インタビュー）、レーティー・ウー・オウンマウン（ベハラ基地で活動。48～52年、地下活動。98年8月15日インタビュー）、キンメー（ボウフムー・チッカウン妻。48～55年、地下活動。96年7月25日インタビュー）によれば当時細胞は確立せず活動するうち自然入党。J-4ではビルマはコミンテルン上海ビューロー管轄下極東地区所属していたが20年代活動し得ず30～31年同ビューロー責任者逮捕により関係遮断。E-5（p. 5-6）E-6（p. 3-4）等ではコミンテルンの影響は主としてCPIから。36～37年カルカッタ大学に学ぶテインペーミンがCPIに接触し、38年ベンガルCPI議長ムスタファ・アーメドに共産党設立助力要請するも、彼自身は39年第一次ビルマ共産党創設にはかかわらず40年同党自然消滅後、42年PRP入党。43年タキン・ソウ再建ビルマ共産党第一回大会開催。44年末PRPと共産党統一案流れ45年7月再統一案決裂。両党間で党員の移動二重加盟も生じたが決裂後9月PRPはビルマ社会党と改称。
- (6) B-19 p. 396-400参照。来訪者はバサー博士、イスラエル・エプスタイン、CPI書記長ジョシー、米国101部隊ハフォード少佐、「人民戦争」記者N. K. チャクラパティ、アウンサン、タキン・タントゥン、フラペー、タキン・ソウ、中国共産党中央委員会大衆闘争部長鄧^{テンファ}発など。
- (7) 送付物はJ-13（p. 28-29）の44～45年の英語文献の他B-19（p. 389-392）では45年4月CPI出版『テヘラン』（E-1）もイエーポー・テー、コウコウヂーらがBCPに運ぶ。その後帰国者があるたびに書物多数を運ばせ、収集にはゴシャールも熱心。45年7月2日CPIと米共産党員から入手の仏共産党J. デュクロによるブラウダー批判のコピーもBCPに送付。
- (8) E-5 p. 59-60
- (9) B-17 p. 65
- (10) B-19 p. 39。帰国までタキン・ミャトゥインが代行。E-6（p. 17）ではタキン・ソウがアナキスト的側面あり一夫一婦制はプロレタリア的自由恋愛に見合わない主張し3人目の妻を持つとしたため書記長解任。
- (11) 論説題目の一部はJ-13 p. 29参照。重要論文はB-17に収録。例えば45年12月7日～13日中央委員会の書記長報告「世界情勢」はp. 522-545。共産党の優勢について例えば46年1月

- A F P F L大会代表1700名中共産党員1300名。(B-7 p. 117-119)
- (12) 元米共産党書記長ブラウダーの20年代米国資本主義を帝国主義中例外的良心的部分とみる階級協調主義「ブラウダー主義」は30年代世界恐慌で破綻したが『テヘラン』をティンペーミンが45年ビルマに送付して復活。彼が影響を受けたジョシーの思想も含め大戦直後彼を通じて流入した一連の「改良主義的」思想をビルマで「ブラウダー主義」と総称した。注(7)の彼のブラウダー批判送付は批判者たちに見落とされた。45年9月以降インドでタキン・ソウは改良主義批判について論議していたが、その相手はC P I内のジョシーとは異なる人々で、C P Iに左翼冒険主義の潮流が存在したことを示す(B-17 p. 84-94)。E-6 (p. 121)では46年1月帰国のソウは党中央委員会招集を要求し自己の「右翼偏向」の責任は一切認めず文獻に依拠して指導部批判を展開する「赤書文書」提出。タントゥンとティンペーミンはソウの批判を全面的に認めた訳ではないが理論的実践的先駆者ソウへのコンプレックスから有効に反論できず。弱体な党に英国帝国主義が送り込んだスパイとソウからレッテルを貼られたティンペーミンは抗日直後の権力奪取に後れを取り武装解除した党の過ちは認めつつ、「帝国主義の手先」A F P F Lからの脱退を要求するソウは反帝統一戦線の分裂を促すとかろうじて批判も。
- (13) C P B労働闘争激化が不穏な空気を煽り5月9日全ビルマ農民機構ヒンダダ大会はサヤー・サン(30年農民反乱指導者)称賛。5月18日タントピンでP V O (People's Volunteer Organization 人民義勇軍。45年9月カンディー条約で正規軍5700名に漏れた元ビルマ軍兵士3000名で結成。指導者アウンサン)と農民のデモに警官が発砲。農民3名死亡、8名負傷。政府第二のサヤー・サン事件となることを危惧。総督5月末P V Oをアウンサンの私兵と批判し反乱軍と規定。全国的に抗議行動発生。B-17 (p. 99-100)ではC P Bの激しい行動に影響を受けたB C PはA F P F Lとの共同行動で警察の許可取得に反対しA F P F L内で対立。キンチーチャーによればA F P F Lの名で党勢拡大活動するタントゥンの評判も悪かった。
- (14) C P Iもその意向(B-17 p. 183)。ティンペーミン報告をタントゥン、バヘイン批判議論せず排除。ソウの批判に自信喪失中のティンペーミンも納得。(同 p. 143)
- (15) B-7 (p. 136)のウー・タンピンの回想。
- (16) 例えばB-26 p. 18-21
- (17) 儒教思想の影響はないが仏教的道德観の厳しい縛りによる封建的非民主主義的発想がビルマ人の精神生活の根底にはあるので、家父長的支配に対して仮にこう呼んでおく。
- (18) その驚異的な非セクト的柔軟性についてB-7 (p. 79-80)のシュエーグー・ソウミンキンの回想参照。
- (19) B-18 (p. 81-85)に詳しい。タントゥンはB C P、B S Pから2名ずつ入閣を要求。当初から入閣反対グループにいたキンチーチャーによれば、閣僚月給は2800チャットで、閣僚撤退はタントゥンの要求が通らなかったため。
- (20) A F P F Lは公務員スト延期を求めB C Pは大衆闘争を盛り上げるより英国との交渉成功に向け政治組織トップ協議を要求。9月20日タントゥン「闘争は経済闘争ゆえ、公務員スト長期化を望まない」旨アウンサンに書簡。またB C P傘下労働者同盟は9月ストに組織的には参加せず10月4日ゼネスト終結後賃上げ闘争展開するが、アウンサンが強引に解除し不満がくすぶり足並み揃わず。A F P F LからB C P除名後P V Oボウ・ティンダン、ボウ・ミンアウンら共産系が離脱して赤軍を結成しピャーボン、ピンマナーなどでP V Oと交戦。バゴウ、ウォーでA F P F LとB C Pが互いに抗議デモ。ピンマナーでB C P、ヤカインでC P B影響下のボンパウ・ターチャー、僧侶ウー・サンダの武装地域が存在(B-17 p. 184-208)。強力な抗日基地だったバゴウやピンマナーは英国復帰後も農民が武装解除せず革命基地構築(キンチーチャー)。B C P内のタキン・タンペーら左派セクト主義者がA F P F L除名直後団結回復求めるタントゥン、ティンペーらに強く反対し、揺れるタントゥンはそれを撤回。(B-17 p. 205-206)
- (21) キンチーチャーは1922年ピャーボンで上級弁護士ウー・バシと妻ドー・ティンの6子の一人として誕生。抗日女性部隊の一員。45年ビルマ女性会議加盟。B-7 (p. 185)では中央委員会で財政担当とし

て資料をそらんじて報告する彼女にティンペーミンが自分がないものを持つと感心し、46年6月求婚。承諾後党政治局に報告。婚約時代CPBから事実無根の中傷を受けたため結婚を急ぐ。11月20日党指導者バヘイン死去するが式延期せずタントゥンとタキン・パティンティンを介添え人として22日挙式。

(B-23 p. 7-8, p. 33-35, p. 160)。以後彼の収入は文筆のみに頼る(B-7 p. 195)。キンチャーチーによれば収入源は他に映画監督で作家のニャーナ紹介のシナリオ執筆(3本1000チャット)、ニョウミャから2000チャット借金し月150チャットずつ返済など。

- (22) 書簡はCPI政治局発行。ティンペーミンは過去の誤謬に自分も責任の一端があると考え党に処遇を任せたらこの決定となる(B-17 p. 479)。実質上無制限休暇で復帰後あらためて任務を与えることに(B-17 p. 205)。書簡はビルマ生まれのインド人共産党員3名の署名があった(キンチャーチー)。
- (23) B-17 (p. 215-267)でティンペーミンは2月慎重な選挙候補者選びを求める書簡を送付。タントゥン3月のピュー人民大会で人選すると述べるが真剣な取り組み回避。ティンペーミン大会前に地代不払い闘争への見解を送り大会での論議を要求。選挙後の4月、土地税、地代不払い闘争、米強奪闘争が農民を分断し選挙敗北につながったとみる選挙総括「手で書き足で消し」(B-17 p. 215-265)送付、議論のため配布を何度も要求。ビルマの現状とアウンサン評価に関する「積み残された見解相違の表明」(B-17 p. 266-267)も送付。
- (24) ティンペーミン7月17日ピャーボンからヤンゴンへ戻り7月19日アウンサン暗殺直後AFPFL副総裁タキン・ヌに、後継者として新内閣組閣を求める私信送付。BCPとAFPFLの第一回団結会談でタキン・ヌ宅にタントゥン、パティンティン、ゴシャール集合。党内事情を知らないボウ・レャーがティンペーミンを招いたためタントゥン怒り以後彼の出席不可。焦燥した彼が発表した論文の偽名をタントゥン見破り除名処分を試みるがティンペーミン抵抗し平党員として党内に残留(B-17 p. 282-294)。ティンペーミンの影響力が恐れられ細胞に所属しない直属党員にとどめられる(キンチャーチー)。

第二章

- (1) ヤンゴン・ビルマ映画演劇協会発行ビルマの繁栄と平和を讃えた作品というのが未発見。B-17 (p. 349-350)とB-21 (p. 105-198)で若干言及。
- (2) B-22 p. 22-35。『ターヤー』誌1巻8号では「時代遅れの作家たち」というタイトルだが内容は『ジャーネーション』と同じ。
- (3) B-5 参照。
- (4) B-25 参照。
- (5) B-15 参照。
- (6) B-8 p. 155-156
- (7) E-4 p. 39-40
- (8) J-6 p. 110
- (9) J-6 p. 112
- (10) B-17 p. 300-322。『ビードゥーアーナー』掲載「英国に債務を返済するな」。発表年月不詳だが47年10月のヌ=アトリー条約と48年1月の独立の間と思われ詳細なデータ多数あり説得性がある。
- (11) B-17 p. 323-340。『タツニー(赤軍)』ジャーナル47年12月3日号掲載「英国の軍事的危険性に警戒せよ」。
- (12) B-17 p. 345-348。48年1月11日執筆同年出版の『一步前進して』序文。上述2論文を含む3論文を収録。
- (13) 学習期間ピャーボン滞在中多数執筆し中央に送ったが掲載不許可(キンチャーチー)。

第三章

- (1) 経過はB-17 (p. 349-356)に詳述。p. 484ではゴシャールテゼ受け入れの指令が下り

- テインペーミンは十分な論議を尽くすことを要求したが無視された。
- (2) B-17 p. 485-486、内容は同p. 358-369。
 - (3) E-2 (p. 11-12) では出席者はタントゥン、ヤンアウン、フラミヤイン、キンチー（バヘインの妻）、イエポー・アウンヂー、パティンティン。大会が47年9月ワルシャワで開催のコミンフォルムの対東南アジア政策を明示したジダーノフ演説の宣伝の場となり影響を受けたとの説もあるが、ビルマではその前に新路線決定。B-17 (p. 356) では大会出席ユーゴ共産党代表が機を飛ばしたことのみにふれる。E-2 (p. 13) の86年12月23日パティンティンへのインタビューでは武装路線は外国の指令でなく独自判断で、むしろ毛沢東の人民戦争路線の影響という。
 - (4) 論文はB-17 p. 370-402。論文発表紙不明。発表日はB-17 (p. 485) では3月26日、同p. 369では3月27日。調停の努力については同p. 369, 485。キンチーチャーによればテインペーミンはこのままでは内戦に巻き込まれると考え離党届けを出すが受理されず28日「共産党日報」が除名発表。
 - (5) B-17 p. 403-406、E-6 p. 25-26, B-18 p. 98-106
 - (6) E-2 p. 12-14。3月28日午前11時30分ヤンゴン市内でタントゥン、パティンティン、ゴシャルによる緊急政治局会議で決定。キンチーチャーによれば、タントゥンはその後故アウンサン宅に潜伏（タントゥンの妻がアウンサンの妻と姉妹）、4月中旬の水祭りの喧噪に紛れ市街脱出。
 - (7) B-17 p. 407-419。15項目は 1. 東欧との政治的経済的交流、2. 企業接収後政府と労働者が管理し生活可能な賃金、8時間労働、団結ストライキ権、年金、接収後の倍償について協議、3. 貿易の政府直轄化、4. 在ロンドン財政計画組織のビルマ移譲、5. 政治的経済的軍事的独立侵害援助拒否、6. 国軍民主的再編、7. 地主制廃止土地分配、8. 工業発展年次計画、9. 山岳地帯に人民政府樹立、10. 官僚機構民主的改編、11. 弾圧法撤廃、12. 資本家の労働者生活権利破壊反対、公務員にも権利を、13. 都市在住貧民、中流層の家賃減額、協同組合設立、闇商売撲滅、14. 義務教育、健康文化育成に政府援助、左翼組織が他組織とも協力し指導、15. BSP、PVO、BCPその他でマルクス主義学習組織設立。その他即時に実施すべきは、地主制廃止土地分配法案上程と官僚機構改革で、AFPFL本部を民主主義的組織に強化するため左翼委員会結成し、BSPとPVO解散し委員会に合流し、赤白両共産党内の内戦反対派も受け入れ1本の政党となるよう努力するなど提案。15項目中15番目削除のものが又和平提案となる。PVOは地下共産党と協議して対案提出。
 - (8) E-2 (p. 15) では地上と地下のPVO勢力は半数ずつ。
 - (9) B-6 (p. 14, p. 32)、B-17 (p. 418-419) ではBCPと一部左翼は14項目はよいがヌ＝アトリー条約存在する限り実現不可能、単に革命勢力の気を引くための創作と批判。ヌは6月13日提案報告集会で14項目は条約の妨げにならず妨げになれば条約廃棄すると発言。
 - (10) 論文はB-17 p. 419-439。B-18 p. 114-117も参照。評議会メンバーは国軍からボウ・バセイン、ボウ・ネーウィン、ボウ・イエートゥン、ボウ・トゥンセイン、ボウ・ゼーヤ、PVOよりボウ・フムアウン、ボウ・セイフマン、ボウ・ミンガウン、ボウ・ラヤウン、ボウ・ニョンマウン、ボウ・アウンニョン、ボウ・ボンアウン、BSPからウー・フラマウン、ウー・パスエー、ウー・チョーニェイン、タキン・ティン、ボウ・アウンヂー、共産主義者はボウ・ティンダン、ボウ・アウンミン、ボウ・ヤンアウンら獄中から釈放された党員とテインペーミン。ネーウィンが議長、テインペーミンが書記長。
 - (11) B-18 p. 116-117。人事ではヌに引き続き首相をさせヌが拒否すればボウ・レチャーに。国防大臣はボウ・ネーウィン、外務大臣はウー・ティントゥッを辞任させウー・OWNまたは評議会選出の誰かを任じることを決定。スミス・ドゥン将軍と副首相レチャーが国防大臣ネーウィン案に反対。ボウ・ゼーヤは評議会に内密にウー・ヌに面会。国防大臣はネーウィンより自分が適任と訴えるなど。
 - (12) B-18 p. 116-119。計画は国軍内部から起こりティンダン、アウンミンら共産党員と白色PVOも同意。社党の一部も支持。
 - (13) B-18 p. 120。8月8日タイエツ駐屯地第一ライフル大隊が地下へ。8月10日ミンガラドン駐屯地ボウ・イエートゥッ指揮下の第3ライフル大隊ならびに第2ライフル大隊隊長ボウ・ゼーヤが地下

へ。

- (14) 逮捕はキンチーチャーによれば8月12日。B-18 (p. 120-121) では内務大臣チョーニェインの妻が電話でティンペーミンを自宅に呼び出し逮捕。これは政敵から保護する意味を帯びた。他に将校の逮捕者がいたらしい(B-20 p. 227) が、なぜネーウィンが逮捕されなかったのか不審な点が多い。
- (15) B-18 p. 121-122

第四章

- (1) 投獄中の出版は他にJ-13 p. 30参照。「母」(1966、B-20収録)『毛沢東の教え』(1952出版)も。キンチーチャーによれば大臣経験者はAクラス(ファーストクラス)待遇で食事もよく週1、2回面会許可。出獄時は傘を差しかける下僕がいたという。
- (2) "Lanza Pawbyi"。道(lan)の出発点(sa)すなわち手がかりが現れた(pawbyi)という意味だがJ-7でこの訳語を使用。作品についてはJ-11も参照のこと。
- (3) エーヤーワディー(イラワヂ)管区ピャーボン県庁の所在地。県南端はマルタバン湾に面し大きな砂浜がある。県内を網の目のように川が流れ水量は潮の干満で増減。交通はサンバンか船。土壌肥沃で水田発達。穀倉地帯。魚やエビ加工も盛ん。56年で町の人口44196名。県内の地名はモン語に由来。ピャーボンはモン語の「飯屋」。町は植民地時代に区画整理され発展。カレン族も多数居住した。(B-12 p. 313-317) 現在さびれているがキンチーチャーによれば当時は風光明媚だった。
- (4) キンチーチャー、レーティー・ウー・オンマウンによるとティンペーミンは46年3月1週間滞在し集会開催。再学習決定後ピューに派遣され47年2月農民大会出席。しかし彼の影響力を恐れた中央は集会開催しないことを条件に3月から7月ピャーボン派遣。しかし多くの人々が会いに訪れ集まりの輪ができる。彼の故郷上ビルマは治安が悪くピャーボンは船で入れば市内だけは安全なのでしばしば訪れた。
- (5) B-16初版序文。
- (6) B-17 p. 107-120
- (7) 中央の批判は四階級に民族資本家が入っていない(B-17 p. 367)、知識人は階級を構成しない(同p. 160)、労働者のヘゲモニーが明記されないのは混乱を招く(B-6 p. 24-25)など。
- (8) B-17 p. 360-363
- (9) コンベントスクール出身の地主の娘の使う英語の用法などを批判(B-4)。映画の過ぎる点の削除、下ビルマ的表現への書き改めなどをおこなう(B-16第2版序文)。
- (10) B-7 p. 340。ティッマウンによる。
- (11) E-3 p. 174
- (12) B-7 p. 261。ゼーヤマウンによる。
- (13) B-2参照
- (14) B-16序文
- (15) B-16序文

第五章

- (1) B-21 p. 161-166
- (2) B-21 p. 77-114
- (3) 例としてタンスエー、ダゴン・ターヤー、グエーターイー、テットウの作品をあげ(B-21 p. 84-95)、英米の娯楽小説の影響も指摘(同 p. 113)。
- (4) B-21 p. 86-88。例としてゾーダー、ミントウウン、マウン・ティン、スィートゥー、アウンソウの作品。
- (5) B-21 p. 82、p. 90
- (6) B-1 p. 109-126。ターヤーは46年2月創刊の『ターヤー』誌で初めて「新文学」なる語を使用。資本主義体制を粉砕し新しい体制を迎え古い文学を捨て新文学を迎えようと唱え新人作家に門戸を

開きソビエト文学や文芸批評を紹介。

- (7) B-21 p. 97-100. 例としてターヤーの他アウンスィー、チャーリン、チョーアウン、ポウレー、ザガイン・ヌエーミン、バモー・ニョウヌエー、ユワディー・トゥイン、マ・オンチャーなどの作品。
- (8) B-21 p. 105-108. 例として48年1月4日独立祭で上演のミュージカル「金の雨銀の雨」をあげる。同作品は3万人が2時間で理解できるよう民俗芸能を取り入れビルマ史を示した。
- (9) B-1 p. 403-404, B-22 p. 88-92
- (10) B-3 p. 392-406
- (11) B-20 p. 214-251. キンチャーチャーによればマウン・ティッは実在の人物。
- (12) 同 p. 251
- (13) B-8 p. 154
- (14) B-9 p. 201
- (15) B-10 p. 113、J-12も参照。
- (16) E-4 p 41-42

結び

- (1) J-8下巻 p. 397
- (2) B-20序文
- (3) 95年8月8日のインタビュー。

文献

- E-1 Browder, Earl "TEHERAN Our Path in War and Peace" New York, 1944
- E-2 Lintner, Bertil "The Rise and Fall of Communist Party of Burma" New York, 1990
- E-3 Min Latt 'A Dawn that Went Astray' "Mainstreams in Burmese Literature" New Orient (bimonthly) II-6, p.172-176, Praha, 1961
- E-4 Milne, Patrica M. "Selected Short Stories of Thein Pe Myint" New York, 1973
- E-5 Taylor, Robert H. "Marxism and Resistance in Burma 1942-1945 Thein Pe Myint's Wartime Traveller" Ohio, 1984
- E-6 Thein Pe Myint "Critique of Communist Movement in Burma" Rangoon, mimeo, nd.
- J-1 岡倉古志朗・鈴木正四編 『民族解放統一戦線ーアジアの現状分析ー』三一書房 1953
- J-2 R. A. スカラピーノ編 高橋正訳 『アジアの共産主義』鹿島研究所出版会 1967
- J-3 大阪外国語大学アジア研究会編『アジア現代史年表』1989
- J-4 トンプソン、アンドロフ共著 大形公平訳『東南アジア ナショナリズムとコミュニズム』弘文堂 1951
- J-5 テインペーミン著 南田みどり訳「石油」蔵原惟人監修『世界名作短編選東南アジア編』新日本出版社 1981
- J-6 テインペーミン著 南田みどり訳「独立すれば」同上
- J-7 テインペーミン著 南田みどり訳「開けゆく道」現代世界と文化の会編『グリオ』vol. 1 平凡社 1991
- J-8 テインペーミン著 南田みどり訳『東より日出ずるが如く』井村文化事業社 上中1988、下1989
- J-9 ボール、W. マクマホン著 大窪愿二訳『アジアの民族主義と共産主義』岩波書店 1967
- J-10 マアウンティン著 河東田静雄訳『農民ガバ』大同生命国際文化基金 1992
- J-11 南田みどり「文学に見るビルマ独立史の一断面ー左翼統一の夢『ランザポービー』（ティン・ペー・ミ

- ン著)の場合－』『鹿児島大学 史録8号』1975
- J-12 南田みどり「テインペーミン短編小説の世界」大阪外国語大学大学院修士会『外国語・外国文学研究1』1977
- J-13 南田みどり「テインペーミン年譜」『大阪外国語大学 学報第五十号』1980
- J-14 南田みどり「『東より日出ずるが如く』にみる1950年代の影」大阪外国語大学アジア研究会『大阪外国語大学 アジア学論叢』2、1992
- J-15 南田みどり「事実と虚構のはざまで－テインペーミン60年代の二長編－」『大阪外国語大学 アジア学論叢』3、1993
- J-16 南田みどり「事実が虚構をしのぐ時代の文学－テインペーミンの抗日時代－」『大阪外国語大学 アジア学論叢』4、1994
- J-17 南田みどり「マウン・ターヤの犬たち」大阪外国語大学世界文学研究会編『世界文学』1、1995
- J-18 南田みどり「寒い国から帰って来たビルマ作家たち－「熱烈歓迎いたします」とその背景－」『世界文学』2、1996、
- J-19 南田みどり「二〇年の孤独－マ・ティーダー（サンチャウン）作品紹介－」『世界文学』3、1997
- B-1 Dagon Taya "Edita Zabwe, Sapay, Anupinnya Webanye hnit Pannuyaungo" 1971, Yangon
- B-2 Dagon Taya '1949-hku Bama Wuthtunya Bagyaung Sapay Beikmanhsu Mapedhale' "Taya Magazine" Vol.4, No.27, p.184-198, Apr. 1950
- B-3 Dagon Taya "Sapay Dhabawtaya Sapay Webanye Sapay Lokshahmu" 1967, Yangon
- B-4 Kyi Aye 'Kareidishein Hpetshin' "Taya Magazine" Vol.3, No.19, p.127-130, 1949
- B-5 Kyi Lin 'Dhabaw Tudhi' "Janejaw" New Vol. 11, No.7, p.19-20, 24th, Jan. 1948
- B-6 Lanzindhadinza Editaahpwe "Nyeinjanye hnit Thein Pe Myint Andaye" 1963, Yangon
- B-7 Man Nyunt Maung "Thein Pe Myint Youkpounhlwa" 1980, Yangon
- B-8 Maung Aung Mun 'Sitpyihkit Myanmar Wuthtudomya' "Saouk Sapay" vol.1, 1973, Yangon
- B-9 Maung Hswe Tint 'Wuthtudo Yeni Yehanmya' "Saouk Sapay" vol.1, 1973, Yangon
- B-10 Maung Sun Yii "Bamaza Bale Bele" 1976, Yangon
- B-11 Min Aung "Moeauk Myepyin" 1949, Yangon
- B-12 Myanmar Naingan Badhapyan Sapay Athin "Myanmar Swezongyan" Vol.7, 1963, Yangon
- B-13 Myanmar Writers and Journalists Association "COLLETED WORKS OF SAYA P.MOE NIN" 1995, Yangon
- B-14 Myanmar Writers and Journalists Association "COLLECTED WORKS OF MAHA SWE" 1995, Yangon
- B-15 Tet Toe 'Ko Thein Pe dho' "Janejaw" Special Vol. No.9, p.14-16, 1948
- B-16 Thein Pe Myint "Lanza Pawbyi" 1963, 3rd ed. Yangon
- B-17 Thein Pe Myint "Tawhlanye Kala Naingnganye Atweacoungmya" 1956, Yangon
- B-18 Thein Pe Myint "Kyaw Nyein" 1961, Yangon
- B-19 Thein Pe Myint "Sitatwin Hkayidhe" 1966, Yangon
- B-20 Thein Pe Myint "Wuthtudo Baungjouk" 1966, Yangon
- B-21 Thein Pe Myint "Taikpwewin Samya" 1968, Yangon
- B-22 Thein Pe Myint "Sabaungzu Sapay Webanye" 1971, Yangon
- B-23 Thein Pe Myin "Tahkudhaw Ngweyadudhabin" 1973, Yangon
- B-24 Thein Pe Myint "Sapay Bawa Zatlanzoung 3" 1981, Yangon
- B-25 Thin Hka 'Dhabaw Matu' "Janejaw" New Vol.11, No.7, p.19-20, 24th, Jan. 1948
- B-26 Yebaw Hla Myo "Thein Pe Myint dhomahou Apegan Naingnganyedhama" 1961, Yangon

(1998.9.21 受理)